

祇王

一名 二人祇王

ワキ 瀬尾太郎

ツレ 祇王

シテ 仏

地は 京都

季は 雑

「是は入道相国に仕へ申す。瀬尾の太郎何某にて候。

さても浄海掌に天下を治め給ひ。栄花の央にて御座候。こゝに祇王御前と申す遊女。唯かりそめに浄海の御目に懸かり給ひしが。御寵愛ならびなし。日夜朝暮の御酒宴申しはかりなく候。又加賀の国より仏御前と申して。是も白拍子にて候ふが。浄海の御目に懸かりたき由を申し出仕申され候へども。浄海の御錠には。いかなる神なりとも仏なり

とも。祇王があらん程は御対面叶ふまじき由仰せ候ふ所に。祇王の御申しには。何れも流れを立つるは同じ事にて候へば。御対面なくては叶ふまじき由たつて御申し候ひて。此四五日は出仕をとゞめ給ひて候。さる間今日御対面あるべき由仰せ出だされ候ふ間。此由祇王御前に申さばやと存じ候。いかに案内申し候。浄海の御錠にて。祇王御前も仏御前も御参りあれとの御事にて。瀬尾の太郎が

参りて候。いかに祇王御前。何とて此間は御出仕もなく候ふぞ。

ツレ詞

「唯今参り候ふ事も。仏御前の訴訟故候ふよ。」

ワキ

「あら今めかしの御事や候。既に御申しにより。仏御前の御参りの上は候。如何に仏御前。唯今の御出仕めでたう候。」

シテ

「申すに付けて憚り多く。御心の内も恥かしやさりながら。申さで過ぎばいとゞしく。願ひの糸の色

見えぬ。闇の錦のたとへても。身のはて如何になりぬらん。同じかざしの花鬘。斯かる恨みは身ひとりかや。」

下歌

「さしも名高き御事の。人をえらばせ給ふかや。」

上歌

「我方の。越の山風吹くたびに。く。高嶺に残る天雲の。隠るゝ空も憂き旅の。何に心の急がれん。都人。いかにと問はゞ山高み。晴れぬ思ひにかきくれて。唯言の葉も泣く露の。それならで故郷の。」

人目にかゝる事あらじ。

ワキ詞

「いかに仏御前。あらおもしろの御述懷や候。又御

錠には。御前にてそと御舞ひあれとの御事にて候。

シテ

「仰せに随ひ立ち上り。まづ悦びの和歌の声。いで

祇王御前同じくは。相曲舞に立ち給へ。

ツレ

「妾はいつもの舞の袖。事ふりぬれば人々も。目が  
れて興やなからまし。

シテ

「実にくさぞと夕顔の。花の狩衣烏帽子を着。袖

めづらかに出で立たん。

ワキ

「実におもしろや舞人の。衣裳を飾らば今ひとしほ。

地

「有明月の影ともに。く。面つれなき心とは。我

だに知れば恥かしや。思ひは朝まだき。花の衣裳

を飾らんと。二人伴なひ立ち出づる。く。(中人)

ツレ

「うれしやな今ぞ願ひは陸奥の。今日を待ち得て舞  
人の。なまめき立てる女郎花。

後シテ

「女姿に立烏帽子。

ツレ 「折から花の狩衣に。

シテ 「袖を連ねて。

ツレ 「立ち出づる。

二人一 声 「よろづ代を。 治めし君がためしには。

地 「巷にうたふ和歌の声。

二人クリ 「それ金谷の春の花は。 一衰の色を見せ。

地 「姑蘇台の秋の月は。 涅槃の雲に隠れぬ。

二人サシ 「一去不來の名残。 送離累別の袂。

地 「いづれの日を経てか乾す事を得ん。 誰あつて終日

をかたらはんや。 あはれなりける。

クセ 「世の中の夢現。 昨日にかはり今日にさめ。 幻の夢

も幾度ぞ。 我等賤しくも。 遊女の道を踏みそめ

し。 心はかなき色好みの。 家桜花しぼみ。 たゞ埋

木の人知れぬ。 世の交はりや蘆垣の。 まめなる所

とて。 初花薄露重み。 穂に出でがたき身なるべし。

こゝに平相国清盛の朝臣とて。 今の世の武将たり。

誰かは恐れざるべき。金玉々殿に。美女の数を集めては。漢宮四台も。これにはいかで勝るべき。中に祇王は好色の。其名にめで、参殿の。始めよりも色深く。比翼連理の其契り。天長く地久し。漆膠の約と聞えしに。

二人「時に仏と号しては。

地「一人の遊女あり。名にしおふ。仏神の御感応か。人心。うつれば変はる習ひ故か。彼に心掛帯の。

引きかへて舞の袖。実におもしろく花やかに。見るこそやがて思草。言の葉も中々。恥かしき余りなりけり。

ワキ詞「いかに申し候。何れも御舞おもしろく思し召され候。然れども祇王御前は御休み候ひて。仏御前一人舞はせ申され候へとの御事に候。

ツレ詞「妾は是に有りてもよしなし。まづく家路に帰り候はん。

ワキ「いや／＼左様に仰せられ候ひては。御機嫌もいかゞにて候。暫く是に御座候へ。如何に仏御前。浄海の御錠には。仏御前一人御舞ひあれとの御事にて候。

シテ「いや祇王御前の御舞ひなくは。妾ひとり舞ひ候ふまじ。

ワキ「御意にて候ふ程に。急いで御舞ひあらうずるにて候。

シテ「羅綺の重衣たる。情なき事を機婦に妬む。いつしか人の心も煩はし。さりとは。

地「さりとは。心に任せぬ此身の習ひ。仏はもとより舞の上手。和歌をあげては袂を返し。返してはうたふ。声もかすむや春風の。花を散らすや舞の袖。返す／＼もおもしろや。

シテ「人は何とも花田の帯の。

地「人は何とも花田の帯の。引きかへ心は変はるとも。

祇王御前心にかけ給ふな。我名は仏神かけて。深  
き契りの中ぞとは。よしなや聞かじと諸共に。空  
言なくこそ契りけれ。

底本…国立国会図書館デジタルコレクション『謡曲評釈 第七輯』大和田建樹 著